慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ベルリン月報』と「水曜会」：18世紀末のベルリンにおける<啓蒙と秘密>
Sub Title	"Berlinische Monatsschrift" und die Berliner Mittwochsgesellschaft: Aufklärung, Öffentlichkeit, Geheimnis
Author	斎藤, 太郎(Saito, Taro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.252(123)- 270(105)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0270

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ベルリン月報』と「水曜会」
――18世紀末のベルリンにおける〈啓蒙と秘密〉――

斎藤　太郎

1

プロイセン宮廷図書館司書ヨーハン・エーリヒ・ビースターとベルリンにおける教育制度の熱心な改革者フリードリヒ・ゲーディケによって1983年に発刊された雑誌『ベルリン月報Berlinische Monatsschrift』は，「ドイツ啓蒙主義が最後の，そして最高の段階において有した最も重要なフォーラム」と評価されている。(1)「真理を求める熱意，有益な啓蒙活動への愛と有害な誤謬を追放せんとの意欲」(2)をモットーとするこの雑誌は，たんに一方的な真理伝達のメディアにとどまらず，多様で活発な議論の場を提供することによって啓蒙主義の確立に資することを目標と定めていた。

> ベルリン月報の目的が達せられるのは，同誌の発表した考えがさらなる論議のきっかけとなったときである。そのようにして明らかになった結論が同誌の主張と正反対なものであってもかまわない。火打ち石はたとえ自分は粉々に砕け散ろうとも何度も打ち付けられて火花を散らし，人類に光と暖を与えることが最上の用途なのであるから。(3)

いっさいの党派主義を排除することを宣言したうえでビースターとゲーディケが読者に求めるのは，議論に供される多様なテーマについてたんに読み，考えるだけでなく，同時に自分の意見を発表することだった。誌上を活発な意見交換の場とし，それをつうじて普遍的理性を社会一般の規範

的原理の座に押し上げることが彼らの目指すところだった。このようなコンセプトを反映して，『ベルリン月報』では数ヶ月，数年にわたって特定のテーマが多彩な観点のもと様々な変奏を奏でながら追究されることも珍しくなかった。[4] 同誌のこうした対話的性格を示す議論は枚挙にいとまがないが，最も知られた例としては「啓蒙とは何か」という問いに対する一連の論考が挙げられるであろう。ドイツ啓蒙主義の自己理解をめぐるこの議論は，ベルリンのみならずドイツ全土の知識人にそれぞれの回答を求めることになった。そのうち最も知られた回答を寄せたのがモーゼス・メンデルスゾーンとイマヌエル・カントであることは言うまでもなく，また，今日『ベルリン月報』がドイツ思想史上記憶に留められているのも両者の啓蒙論によるところが大きい。

だが，啓蒙主義論争と並んで，あるいはそれ以上に当時の『ベルリン月報』読者たちに強烈な印象を与えた議論は，18世紀末に広く社会一般の関心を集めつつあった秘密結社をめぐる一連の論争であった。1760年代以降フリーメイソンが混乱の度を高めつつあったなかで，70～80年代には秘密結社運動の分裂と政治化が顕著となっており，啓蒙主義的結社「啓明結社」と反啓蒙主義的「黄金・薔薇十字団」のようにそれぞれの政治的目標を〈秘密〉を手段に実践に移そうとする試みが見られるようになっていた。このような背景のもと，編集者の一人ビースターが論争の過程で述べたように，「この重要な問題をはじめて議論の題材としたのは『ベルリン月報』の特筆すべき功績」[5]であるといえる。秘密結社活動をめぐる論争に費やされた多大のエネルギーは，このテーマの衝撃度の高さを示すとともに，啓蒙主義運動の自己理解上，当時きわめてアクチュアルであった〈啓蒙と秘密〉の概念がいかに複雑で錯綜した関係にあったかを如実に物語っている。

今日の観点からすれば，〈啓蒙と秘密〉が相対立する関係にあることは自明のことと思われる。啓蒙は本質的に公開性を基盤とした運動であり，公開性は啓蒙が自己展開してゆくうえで不可欠な前提条件であるはずであって，秘密は啓蒙主義的認識の過程を阻害する要素と考えられるからで

ある。事実，18世紀末ベルリンの啓蒙主義陣営は，秘密結社の活動を反啓蒙主義的策動と結びつけて激しい攻撃を加えている。だが，『ベルリン月報』にとって〈啓蒙と秘密〉の問題はこうした観点に尽きるものではなく，この雑誌自体の根幹にかかわる避けて通れぬテーマであった。なぜなら，『ベルリン月報』は成立過程においても目標設定においても，秘密結社的性格が顕著な団体「水曜会」と不可分な関係にあったからである。

2

『ベルリン月報』創刊と同年の1783年秋ベルリンに設立された「水曜会die Mittwochsgesellschaft」は，正式名を「ドイツ啓蒙主義者友の会die Gesellschaft der Freunde der Aufklärung Deutschlands」と称し，創設時12人，最大時24人の会員を擁する閉鎖的団体であった。(6)会員の大半は，プロイセン政府の宗教・教育分野統括大臣であり自他共に「啓蒙主義の庇護者」(7)と認めるK. A. F. v. ツェドリッツの指揮のもと，プロイセン官僚組織内の啓蒙派を形成する人々だった。ビースターはツェドリッツの私設秘書としてそのキャリアをスタートしているが，彼が刊行する『ベルリン月報』創刊号（1783年1月号）巻頭をツェドリッツの肖像が飾っていることからも，ベルリン啓蒙主義にとって彼が象徴的存在であったことが理解されるであろう。水曜会はモーゼス・メンデルスゾーンを名誉会員，ビースターを幹事として発足し，会員にはゲーディケ，財務局枢密顧問官K. A. v.シュトルーンゼーとJ. H. ヴレーマーおよびL. F. G. v. ゲッキング，枢密文書館員Ch. W. v. ドーム，宗教局顧問官J. S. ディートリヒとW. A. テラーおよびK. F. v. イルヴィング，神学者J. F. ツェルナーとJ. J. シュパルディング，宮廷医J. K. W. メーゼンとCh. G. ゼレ，法務局枢密顧問C. G. スワーレス，法学者E. F. クライン，書店主で文筆家のF. ニコライなどがいた。会員の顔ぶれを眺めると，そのほとんどがベルリン啓蒙主義の代表的論客として『ベルリン月報』の有力な寄稿者集団をなしていることが見てとれ，同誌が水曜会の「なかば公式の発表機関」(8)であるとの印象が強い。

水曜会の目的は，「健全な理性が，人間に関わる事柄いっさいの王座へと

のぼりつめて，人智の領域に関わるすべての事柄を無制限に領するよう手助けをする」こととされた。[9]こうした目標を達成するためにおこなった活動は，ニコライの証言によれば，「あらゆる種類の真理を自由に探究」することであり，「会員たちがもっぱら目指したのは，興味深い対象，とくに学術的な対象について理性的な論議を交わし，こうした友好的な見解の交換をつうじて互いの精神を啓蒙し，さまざまな種類の概念を明晰に理解するとともにこれを偏見ぬきで検証する」ことであった。[10]会員たちは冬季は月二回，夏期は月一回水曜日午後6時に順繰りに会員宅に集まって討議と食事を共にした。毎回ホスト役の会員が定められたテーマについて講演をおこない，つづいてその内容に関して会員たちが席次順に意見を述べた。扱われたテーマは，「国家や財政の運営，立法，思弁哲学ならびに実践哲学」の領域が多く，「文芸についてはごくまれ」であり，他に宗教，検閲，軍制度，フランス革命，貴族に対する課税，カントの道徳原理などについても論じられた。[11]会員たちは「あらゆる意見に対する完全な寛容」を守り，「たとえ辻褄が合わないと思われるような意見をも」尊重するよう求められ，意見をめぐって「会の内外を問わずいかなる敵対関係」が生じることも固く禁じられていた。[12]

プロイセンの国家制度，ひいては人間社会一般にかかわる多様な主題について偏見を排した理性的規準に基づいて自由な議論をおこない，それをつうじて社会の漸進的改革をめざすという点においては，水曜会の方向性自体は〈社交の世紀〉に多数生まれた啓蒙主義的団体とさほど異なるところはないといえる。しかし，水曜会を類似の諸団体とわかつ決定的な特徴は，厳格に遵守された秘密原則にあった。水曜会はこの原則を，彼らの活動を保証する重要な要素と考えており，創設時の規約第一条において会員に対し「名誉にかけて，集会における発言内容のいっさいについて厳しく沈黙を守ること（…）のみならず会の存在についても多くを語らぬこと」を課している。[13]集会でおこなわれた講演の原稿は，幹事ビースターの管理のもと部外者の目に触れぬよう施錠した小箱に入れられて会員の回覧に供せられ，会員がこれを再読のうえ書き記した「所見（Votum）」がさらに

次回集会で議論の俎上にのせられた。[14]

水曜会の活動を特徴づけるのは一方において，議論と批判によって真理に接近しうるという確信であったが，他方はっきりとうかがえるのは，会員自身の真理探究にとどまらず，啓蒙思想をより政治的・実践的なレベルで実現に移そうという意思であった。「われわれの意図は，われわれ，そして仲間である市民たちを啓蒙することである」という，メーゼンの言葉はその意味に解することができよう。事実，同会の会員名簿からは，実際のプロイセンの行政機構において影響力をもつ思想的同志を糾合して，社会の具体的改革を推進しようとの意思を読みとることができる。財務局枢密顧問の地位にあったゲッキングはこの点についてこう伝えている。「この会がなしとげた優れたおこないのうち，際だった例はいくつも挙げられるが，ここではただ，プロイセン一般ラント法がこの会に多くを負うていることを述べるにとどめよう。ラント法の成立に大きく関与したスワーレスの理念の多くはこの会があってはじめて正しい形を得たのである」[15]

水曜会の基本方針については証言者の間で一致が見られるものの，意外なことに旗印である啓蒙の概念およびその促進手段についてはなかなか見解の一致が見られなかった。例会におけるK. W. メーゼンの講演「〈啓蒙とはなにか〉という問いに関する議論開始の提案」を機縁に1783年から84年にかけて啓蒙の本質を問う議論が起こったが，そのプロセスを見ると会員たちが啓蒙概念の規定にさいして困惑を余儀なくされたことが浮かびあがってくる。法学者E. F. クラインはその講演のなかで「啓蒙とは，諸事象の真の価値を正しく評価することを可能にする知識を広めることである」と述べ，さらに「その意味で（…）啓蒙には徳と幸福が伴っていなければならない」と主張しているが，この種の敷衍は啓蒙概念を明確化するよりむしろ曖昧化している観が否めない。上にも触れたように，「啓蒙とはなにか」に関する議論は水曜会内部の議論と並行して『ベルリン月報』誌上で展開されてゆくのだが，その出発点となった問いがほかならぬ水曜会会員J. F. ツェルナーが自身の同誌への寄稿論文（1783年12月号）中で発したものであり，いわば水曜会内部で明確な回答の得られぬ問いを公共圏に拡

大する意味を担ったことは注目に値する。「この問い〔=啓蒙とはなにか〕は〈真理とはなにか〉と同じぐらい重要であって，そもそも啓蒙を始める前に答えられていなければならないはずだ！それなのに，この問いに対する回答はどこにも見あたらないのである！」(16)

『ベルリン月報』編集者ゲーディケもまた，水曜会例会で講演をおこなって啓蒙主義論争に一石を投じている。しかし彼の議論に特徴的なのは，普遍妥当性をもった啓蒙主義概念の確定にさほど重点を置かず，むしろ啓蒙を具体的現象面から理解しようとしているところである。彼は「啓蒙とは真理と同様相対的な概念」であって，地理的，歴史的，社会的，個人的諸条件の制約下にあると考える。「啓蒙は，主観的事情だけでなく場所や時代や身分や性別といった客観的事情ごとに多様なのであり，また多様たらざるをえない」との認識に立つゲーディケは，啓蒙拡大のための戦略もまた所与の諸条件ごとに異なった形をとるべきであると主張する。「啓蒙の例外なき平等など，諸身分の完全な平等と同じく望ましくもなければ——ありがたいことに——ありえないことでもあるのである」(17) 諸身分の完全平等を断固否定するゲーディケの発言には，フリードリヒ二世治下のプロイセンにおける啓蒙専制主義への明確な信仰告白が読みとれるが，同時に水曜会を構成する官僚エリートたちに支配的な，広範な市民層による啓蒙思想受容の可能性に向けられた深い懐疑があらわれているといえよう。「啓蒙」の前提にあるのが，個々の人間主体に分け与えられた「普遍的人間理性」という理念であることは言をまたないが，「啓蒙の友たち」の現実認識は，理性の分配が実際の社会においてはきわめて不平等であって，したがって国家を構成する階層の一部は理性と理解力を欠いており，合理性原理に則って行動する能力がない，というものだった。「水曜会」が秘密の誓約に守られ，外部に対して閉ざされた言論空間を要請したひとつの理由はまさにこのような現実認識にあったと推論できる。「啓蒙の友たち」にとって外部の公共圏は一方で啓蒙活動の対象と認められながら，他方ではこの公共圏は水曜会内部の言論空間を正当に評価できるだけの成熟度に達していないと認識されていた。したがって，水曜会内部で「自由に」表

明された意見が外部に漏れた場合，無理解のみならず誤解や偏見を招来してそれぞれに枢要な地位に就いている会員に「なんらかの不利益や公衆のなかに好ましからざる評判」が生じることも懸念されねばならなかった。[18] レッシングやグライムの友人でプロイセン軍幼年学校哲学教授のK. W. ラムラーは，当初水曜会の理念に賛同し「共和主義的精神を持つ方々の会に加わること」を「喜び」としながら，ほどなく参加を断念しているが，その理由もおなじ懸念によっていた。[19] 啓蒙という事業は公共圏に依存しているが，しかし公共圏は啓蒙の進展を阻害しかねない——この撞着的状況の認識が水曜会において啓蒙と秘密という矛盾する要素の併存を可能ならしめた要因であったことは疑いえない。

だが，水曜会会員たちが恐れた「なんらかの不利益」とは具体的になにを想定していたのだろうか。この点について示唆的なのが，やはりゲーディケによる講演『今日の妄信について(Schwärmerei)』である。この講演では，たんに公衆の無理解が啓蒙進展の障碍となるという認識が述べられているだけでなく，より積極的に啓蒙を阻害しようとする勢力があることが暗示されている。彼は「啓蒙の友たちの会がいまほど必要な時代はない。われわれが勇気と知恵をふるって蔓延する妄信に対抗するならば，われわれの結束は最も有益な存在となりうるであろう」と述べ，啓蒙の敵である「妄信の精神」と戦うことを水曜会の「崇高な目標」と位置づけている。事実，〈啓蒙の世紀〉も終わりに近づこうとしていた80年代初頭において，錬金術や招霊術など，啓蒙運動が一掃したかに見えた「妄信」は猖獗をきわめており，この現象をいかに説明するかは啓蒙主義陣営につきつけられた難問であった。ゲーディケ／ビースターの『ベルリン月報』もこうした妄信の事例をくりかえし取り上げて警告を発している。メンデルスゾーンのように，野放図な理性信仰がかえって「不信仰」と同時に「迷信」をも生みだしたと冷静に分析する者もあったが，[20] ゲーディケはこうした現象を啓蒙のプロセスに内在する問題と解するのではなく，あくまで戦いを挑むべき〈理性にとっての他者〉と考えていた。彼は「われわれが自分自身を啓蒙し，妄信のいかなる気配をもはねつけるべく努めるだけでは充分とは

いえない」としたうえで，会員たちは「外部に向けて活動しなければならない」と主張するのである。[21] ゲーディケのこの言葉には，水曜会を自由な論議による自己啓蒙という枠を踏み越えて一種戦闘的集団に発展させようとの意思が表れているが，同時に「外部に向けて活動」しつつなおも秘密による防御の原則を崩さぬところに，彼の懸念する「不利益」の大きさがうかがわれる。水曜会が活動を開始した1783年は，王位交替により啓蒙主義に対する抑圧的措置が公然とおこなわれるはるか以前であるため，「国家当局の措置に対する恐れ」から水曜会の秘密主義を説明することはできないという解釈も存在するが，[22] 当時の王都ベルリンの状況を子細に検討するならば，ゲーディケの懸念がまったく根拠を欠いたものではなかったことが浮かびあがってくるのである。

3

1780年代初頭のベルリンにおいて，老いて病気がちなフリードリヒ二世の時代が終焉に近づいているという意識はひろく共有されていた。ベルリン市民の関心は必然的に王位継承者フリードリヒ・ヴィルヘルムの言動に集まっていたが，嫡子をもたなかったフリードリヒ二世の甥にあたる彼は，「玉座の哲学者」と呼ばれた叔父と対照的に，超自然的諸力の存在や死者の霊との交流に対する関心を隠さなかった。[23] 後の王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世のこうした性向を最大限に利用しようとしたのが神秘主義的・反啓蒙主義的秘密結社「黄金・薔薇十字団」ベルリン支部の中心人物，J. Ch. ヴェルナーとビショフヴェルダーである。ブランデンブルクの牧師一家に生まれたヨーハン・クリストフ・ヴェルナーはハレ大学で神学を学んだのち，1753年グロース・ベーニッツの貴族イッツェンプルッツ家で家庭教師の職につく。数年間牧師として活動したのち，彼は同家の領地経営に関する相談役のポストにつくと，農業や農地経営に関する研究を精力的におこなっていくつかの著作を発表している。順調な滑り出しを見せた彼の立身出世の道は，1766年にイッツェンプルッツの娘と婚約したことによっていっそう確実なものとなるはずだった。だが，この試みは「身分違

いの結婚をきらう」フリードリヒ二世の不興を買うことになってしまう。力ずくでこの結婚を解消させようとするフリードリヒの試みは結局成功しなかったが，この一件によりヴェルナーは啓蒙専制君主を敵に回すことになった。のちにヴェルナーに対する爵位授与の申請がなされたとき，フリードリヒ二世は「ヴェルナーは策略好きな詐欺師まがいの坊主だ」といって一蹴したという。(24) 本来啓蒙主義的思想の持ち主だったヴェルナーは大きな思想的転回を遂げて自他共に認める戦闘的反啓蒙主義者へと変身するのだが，彼のフリードリヒ二世に対する個人的憎悪がその大きな要因のひとつであったことは想像に難くない。フリードリヒ二世が統治するかぎり，宮廷社会に進出することは難しいと見て取ったヴェルナーは，立身の道を別のところに探ることを余儀なくされる。その彼が選んだのが秘密結社であった。

すでに1766年にベルリンのロッジ「調和」においてフリーメイソンへの入会を果たしていたヴェルナーは，高位階制フリーメイソン「厳格な服従」のベルリン地区長として活動を続けるかたわら，錬金術的・神秘主義的結社「黄金・薔薇十字団」にも入会し，早々にベルリン支部長の地位を手中にする。彼は本来政治色の薄かった同結社を70年代半ば以降しだいに反啓蒙主義的秘密結社へと再編成し，政治的野心実現のための道具と化していった。ヴェルナーは腹心の結社員でプロイセン軍将軍J. R. v. ビショフヴェルダーの協力を得て，王位継承者フリードリヒ・ヴィルヘルムを精神的影響下に収める計画に着手する。ビショフヴェルダーは腹話術師シュタイネルトの協力のもと，彼自身が一時心酔し，自分の面前でピストル自殺を遂げた自称超能力者シュレップファーから学んだトリックを駆使してフリードリヒ・ヴィルヘルムの眼前でいくどとなく招霊術の実験をおこなった。奇蹟信仰への傾きがあった王太子はこうした詐術の格好の餌食となり，1781年8月8日，結社員名「オメニウス・マグヌス」を授けられて黄金・薔薇十字団に入会するのである。

黄金・薔薇十字団の勢力拡大は，1776年インゴルシュタット大学教会法教授アダム・ヴァイスハウプトによって結成された急進啓蒙主義的秘密結

社「啓明結社」と同様，18世紀後半に生じたフリーメイソンの混乱状態を利したものだった。啓蒙主義的理性主義のもと三位階制を採るイングランド系フリーメイソンに対し，50年代半ばから急速に大陸各国に伝播したフランス系フリーメイソン「厳格な服従」は，メイソンの聖堂騎士団起源説を唱えて従来の三位階の上に「内なる結社」と呼ばれる諸位階を設定し，その頂点には「知られざる上司たち」が立って全体を統括しているとの伝説を形成した。この「高位階制メイソン」は神秘的諸要素を持ち込むことによって，イングランド系のシンプルな三位階制に飽きたらぬフリーメイソン会員たちの関心と支持を集めることには成功したが，他方では組織の全貌や指導者が意図的に隠されたためさまざまな憶測や懸念を呼ぶことにもなった。なかでも，レッシングの友人であり「厳格な服従」の財務長官の地位にあったJ. Ch. ボーデは，フリーメイソンを操っているのはローマ教皇が発した解散令によって地下組織化したイエズス会士たちであり，高位階制メイソンに流入した神秘主義的要素はプロテスタントの信者をカトリックに改宗させて，ヨーロッパ諸国を再びローマ教会の精神的支配下に置かんとするための手段であるとの〈隠れイエズス会陰謀説〉を主張した。70年代から80年代にかけて「知られざる上司」を自称する詐欺師が横行したこともあって，フリーメイソンの混乱と危機の解決を目指す会議が頻繁に開かれたが，その総決算ともいえるのが1782年9月にハーナウ近郊の保養地ヴィルヘルムスバートで開催された国際フリーメイソン会議であった。同会議では「知られざる上司」の廃止が決議され，「厳格な服従」は後続組織「慈善騎士団」へと発展解消することになったが，フリーメイソンの真相をめぐる疑惑や憶測を完全に消し去ることはできなかった。

黄金・薔薇十字団と啓明結社はともにヴィルヘルムスバート会議の結果に失望したフリーメイソン会員たちを勧誘することで飛躍的な勢力拡大を果たした。政治的目標は正反対でありながら，双方とも自分の組織がフリーメイソンの〈真の〉高位階であると自称することにより，既存の三位階制フリーメイソン・ロッジを下部組織化するという戦略を共有していた。ヴェルナーの結社員名「クリュゾフィロン」を著者名とする1782年の

『黄金・薔薇十字団員の諸義務』では，フリーメイソンは黄金・薔薇十字団の「最高指導者たちによって考案されたものであって，真の高き結社に到達することができるよう人々を準備し育成する養成所である」とされ，「フリーメイソンは神殿の前庭にすぎず，この神殿の隠された戸口を見つけて開くのは，その資格あるフリーメイソン会員だけ」であると述べられている。[25] 一方啓明結社創設者ヴァイスハウプトもまた，組織の拡大と円滑な活動をするうえで高位階制メイソンの伝説は格好の材料であるとして，「下部のフリーメイソン・ロッジ〔=三位階制ロッジ〕はわれわれの高次の目的を包む最高の衣装である」と述べている。[26] こうした戦略に則り啓明結社はフリーメイソンの熱心な改革論者であるボーデの勧誘に成功するのだが，これによって，神秘主義的・反啓蒙主義的色彩を有するすべての人物・組織の背後にイエズス会およびローマ・カトリックの策動を見るボーデの陰謀理論が，まず啓明結社に，ついで水曜会を経由してベルリンの啓蒙主義者たちに受容されることになるのである。

4

次期プロイセン国王と黄金・薔薇十字団の関係はむろん伏せられていたが，役職上宮廷と密接な関係に立っていた水曜会会員にはいつまでも隠しおおせるものではなかった。会員で宗教局顧問官のJ. J. シュパルディングは，フリードリヒ・ヴィルヘルムが「ある秘密結社に所属し，その内奥深くに通じた人物たち」を側近に迎えていることに触れ，その者たちの意図が「宗教的認識の判断から理性の発言権をできるかぎり排除し，真のキリスト教道徳を無視してこれを衒学趣味と神秘主義の暗黒状態へと引き戻す」ことにあるのだと警告を発している。[27] 同じく水曜会会員F. ニコライはのちの回顧のなかで，黄金・薔薇十字団が政治的影響力を行使し始めた時点を1778年と特定してこう述べている。「フリードリヒ大王の死が間近に迫っていると見られた頃，知られざる上司たちは次期国王に対する影響力を得たと考え，これを利して自分たちの意図をプロイセン国家組織の側から達することに大きな期待をかけていた」[28]

事実，外部の現実世界における権力関係と隔絶した空間を標榜する秘密結社においてフリードリヒ・ヴィルヘルムの「上司」の位置に立つことに成功したヴェルナーは，水曜会の結成および『ベルリン月報』の刊行開始と時を同じくする1783年半ば頃から，黄金・薔薇十字団の教義を教授するという形で，次期国王に対し政治思想教育をおこなうとともに自己の現実社会における地位の確保にのりだしていった。なかでも彼が1785年9月1日，フリードリヒ・ヴィルヘルムに与えた『宗教論』においては，フリードリヒ二世治下の啓蒙主義者に対する憎悪もあらわに，王位交替のあかつきに実行を目論む宗教政策が明確に提示されている。(29) 同論文のなかでヴェルナーは，国家の最重要な基盤をなすのは「純粋な真のキリスト教」であることを説いたのち，王都ベルリンが「全ドイツの不信仰の中心」と化し，「あらゆる魅力」を失って破滅的な現状に至っていると主張する。その原因はフリードリヒ二世の宮廷にはびこる「自由思想」と「キリスト教に対する軽侮」にあり，それが宮廷の権威を背景に広く一般社会に浸透したのが現状であるというのである。真理の探究者を僭称する啓蒙哲学は傲慢にも，「理性で把握できないこといっさい」，すなわち啓示宗教を否認することによってプロイセンの臣民たちを「疑念の迷宮」に陥れ，魂の平穏を奪い去ったとする。このような状況に立ち至った最大の責任者としてヴェルナーが名指しにするのが，フリードリヒ二世の信任厚く，宗教および教育部門の統括大臣ツェドリッツである。ツェドリッツの地位を襲うことを願いつづけ，1786年にはそれに成功することになるヴェルナーは，「最大の自由思想家にしてイエスの名の敵」であるツェドリッツが，「おのれの名望を濫用して，キリスト教を国から一掃し，理神論と自然主義を着々とプロイセン国家に導入した」と非難する。(30) 続けて怒りの矛先はツェドリッツの共犯者たるゲーディケとビースターに向けられる。「不信仰の使徒」である彼らは『ベルリン月報』をつうじて「キリスト信仰に対する卑劣な攻撃を臆面もなく毎月公然と印刷」しているときめつけられ，「神聖なるフリードリヒ・ヴィルヘルム王の御代であったなら，二人はまちがいなくシュパンダウの監獄へと送られたことだろう。それがわれらの時代には一

人は宗教局顧問官，一人は王立図書館員におさまりかえっているのだ」[31]という呪詛の言葉を浴びせられるのである。

こうした反啓蒙主義の攻勢に対し，対抗勢力もまた手をこまねいていたわけではなかった。啓明結社もまたプロイセン次期国王の獲得をねらっており，1784年9月には結社員ゴータ公エルンスト二世がデッサウに赴き，フリードリヒ・ヴィルヘルムと会談して勧誘する計画が実行に移されるまで至っていた。しかし，プロイセンの進路を左右しかねないこの次期国王の獲得合戦は，すでに見たとおり黄金・薔薇十字団が機先を制したことで決着がついていた。[32]こうした展開を見るうえで注目すべきは，水曜会会員のなかに少なからず啓明結社のメンバーが含まれていたことである。啓明結社研究家H. シュットラーによれば，水曜会会員のなかで同時に啓明結社に所属していたのはF. ニコライ，F. M. ロイヒゼンリング，Ch. K. ドーム，ゲーディケ，ビースターの五名である。ただし，ゲーディケとビースターが啓明結所属については，傍証として挙げられている文献がL. A. C. v.グロルマン，A. シュタルク，A. バリュエルらによるもので，彼らが揃ってフランス革命勃発後に「革命＝啓明結社の陰謀」という理論を掲げて登場した反革命・反啓蒙主義者であったことを勘案すると，その信憑性にはいくぶん疑問の余地が残るといわねばならない。だが，少なくともゲーディケとビースターが，ヴァイマールにおける啓明結社の指導者であったボーデと密接な協力関係を結び，ボーデの唱える「隠れイエズス会陰謀説」を全面的に受け入れていたことは事実であった。[33]

啓明結社と水曜会の関係において重要な役割を演じたのが「ボーデとベルリン啓蒙主義者たちの最も重要な仲介者」フランツ・ミヒャエル・ロイヒゼンリングである。[34]ヘッセン=ダルムシュタットの宮廷顧問官であり，ダルムシュタット公子の傅育官であったロイヒゼンリングは，1782年秋にベルリンを訪れ，ニコライやメンデルスゾーンと親交を結んだのち，1783年には啓明結社の傘下にあるノイヴィートのフリーメイソン・ロッジで啓明結社に入会する。同年彼はベルリンを再訪し，設立間もない水曜会の会員に迎えられる。おそらく彼はこの機会にボーデの「啓蒙に対する陰謀」

の説を「啓蒙主義の友たち」のもとに伝えたものと推測される。[35] ロイヒゼンリングのなかに活発な伝道者を見いだしたボーデの「イエズス会陰謀説」がフリードリヒ・ヴィルヘルムに対するヴェルナー／ビショフヴェルダーの工作と関連づけられる形で，おそくとも1783年10月にはベルリン啓蒙主義者の間を流通していたと考えられることは，F. V. プレッシング（1749-1806）のカント宛書簡にも見て取ることができる。ゲーテに『冬のハルツ紀行』（1777年）執筆の刺戟を与えたことで知られるプレッシングは1783年にベルリンを訪問し，ドームやイルヴィングをはじめとする水曜会会員と親交を結ぶと，ゲーディケと共にブロッケン山への旅行をおこなったのち，かつての恩師カントに宛てて書簡を送り，「理性と人類の幸福の敵対者」である「イエズス会士たち」がさまざまな隠れ蓑やコネクションを用いて策動を続けており，なかでもプロテスタントの君侯をカトリックに改宗させることによって中世時代さながらに精神の隷属状態を再現しようと試みていると警告を発している。プレッシングはその具体例として「シュレップファーのかつての仲間がポツダムとベルリンでさるやんごとない方の側近となってい」ることを紹介しているが，これはあきらかにビショフヴェルダーとフリードリヒ・ヴィルヘルムを指している。彼によれば「招霊術の類に対する妄信や錬金術など」の流行もまた奇蹟信仰を利して理性の力を排除しようとする彼らの陰謀であって，今や「圧政，妄信，迷信が全ヨーロッパを屈服させようとしている」のである。[36]

ロイヒゼンリングはこのようにベルリンとヴァイマールの啓蒙主義者たちの間にイデオロギー的連帯を築いたわけだが，他方彼はプロイセン宮廷においても具体的に政治的な役割を演じた。彼は1784年4月，フリードリヒ二世から王子（後のフリードリヒ・ヴィルヘルム三世）の教育係に任命されるのである。この人事はJ. F. v. シュタインおよび水曜会と啓明結社双方の会員であったCh. W. ドームの推挽によるものであったが，[37] これはヴェルナーとビシュフヴェルダーの王位継承者に対する影響を抑制しようとする宮廷内啓蒙主義派の政治的対抗策と見ることができよう。しかし，この試みはロイヒゼンリングがはやくも同年7月に解任されたことによって失

敗に終わる。ヴェルナーがおそくとも1782年9月ハーナウ近郊ヴィルヘルムスバートにおけるフリーメイソン会議以降ライバル組織啓明結社とそのイデオロギーについて詳細な情報を得ていたことを勘案するなら，啓明結社員ロイヒゼンリングの解任人事にも彼の関与があった可能性は否定できない。ヴェルナーは事実黄金・薔薇十字団のネットワークを利用して啓明結社の活動を妨害することにつとめていた。ヴェルナーは啓明結社の結社員名簿をミュンヘンの黄金・薔薇十字団ミュンヘン支部長で元イエズス会士のI. フランクのもとに送ることによって，1784年半ばに始まるバイエルン政府の啓明結社弾圧にも間接的に寄与していた。聴罪司祭としてプファルツ=バイエルン選帝侯カール・テオドアに影響力をもっていたフランク神父は，この名簿をもとに「全力で彼ら〔＝啓明結社〕の破壊に取り組み（…）インゴルシュタットの首魁二名の財産を没収し，見せしめに妻子もろとも無一文の身で追放して（…）バイエルンにおける啓明結社の最後の審判の日を招来せしめた」ことを報告している。(38)

このように，公共圏を排除した〈秘密〉の領域で政治的暗闘が展開していた事実を考慮するなら，水曜会における〈秘密〉の意味もおのずと新たな解釈を要することになるだろう。むろん，党派性を排除し異なる意見をも尊重することを原則としていた水曜会の会員は，秘密保持の根拠について，また啓明結社のような組織の是非についてまったく同様の認識を共有していたわけではない。たとえばメンデルスゾーンは水曜会の講演で明らかに啓明結社を念頭において次のように述べている。

> 民衆の目を眩ませることを目的とする秘密結社があるのは大いに理解できる。（…）しかし，密かに結束し，密かな活動によって民衆を啓蒙すると称する秘密結社はどこか矛盾するものを含んでいるように思われる。最終的な目的が世に伝えることにあるのならば，どうしてその手段を秘密にしておけるのかが腑に落ちないのである。(39)

メンデルスゾーンのこうした〈秘密〉批判にもかかわらず，少なくともゲーディケとビースターの二人にとって，秘密は反啓蒙の策動から身を守るために必要な防護壁という意味をもっていたと考えられる。だが，ヴェルナー一派の攻勢によって啓蒙主義が，そして水曜会に理想的な形を見いだした自由な言論空間が危機に瀕していると認識したとき，彼らは反撃のためにもうひとつの武器である公開性を選ぶのである。彼らは『ベルリン月報』1784年2月号を皮切りに「隠れカトリック」キャンペーンを開始し，狙い通りドイツ中の耳目を聳動することに成功するのだが，賛同や反論から冷笑や嘲笑にいたるまで多様な反応を呼んだこの奇妙な論争については稿を改めて論じることにしたい。

注

(1) Krauss, Werner: Über die Konstellation der deutschen Aufklärung. In: ders., Studien zur deutschen und französischen Aufklärung. Berlin 1963, 350頁.

(2) Biester, Erich u. Gedike, Friedrich: Vorrede der Herausgeber. In: Berlinische Monatsschrift, I. Bd. (1783), Januar, 頁数なし.

(3) Biester u. Gedike: Ueber einen Aufsatz im deutschen Merkur und einen andern in Schlözers Staatsanzeigen, beide die Berlinische Monatsschrift betreffend. Bd. III (1784), Juni, 571–576頁, 引用は571頁.

(4) 『ベルリン月報』が取り扱うテーマとして挙げられているのは1. 全学問分野からの最新情報，2. 諸民族の風俗習慣，3. 人間に関する諸知識，4. 優れた人物の評伝，5. ドイツ語およびドイツ語文芸，6. 古典古代文献の翻訳，7. 外国語文献の翻訳抜粋，8. その他さまざまな論考，となっている。Vorrede der Herausgeber, 同上.

(5) Biester, Erich: Beschluß von Biesters Antwort an Herrn Professor Garve. In: Berlinische Monatsschrift VII. 1786 (Januar) , 30–66頁, 引用は 31頁.

(6) 「水曜会」の設立時期については研究者によって見解が分かれている。イルヴィングによる最初の正式な例会への招待状は1783年10月3日付けとなっているが，モーゼス・メンデルスゾーンに名誉会員への就任を要請するビースターの書簡は83年3月に書かれたと推測されており，すくなくとも正式な発足以前より長期にわたって準備がおこなわれていたものと思われる。Nehren, Birgit: Selbstdenken und gesunde Vernunft. Über eine wiederaufgefundene Quelle zur Berlinier Mittwochsgesellschaft. In: Aufkläung. Jg. 1, H. 1(1986), 87–101頁, 引用は90頁.

(7) カントは『純粋理性批判』冒頭の献辞においてツェドリッツをこう呼んでいる。Kant, Immanuel: Werke in zehn Bänden. Hrsg. von Wilhelm Weischedel. Darmstadt 1981. Bd. 3, 9頁

(8) Möller Horst: Preußische Aufkläungsgesellschaften und Revolutionserfahrung. In: Büsch, Otto und Monika Neugebauer-Wörk [Hrsg.]: Preußen und die revolutionäre Herausforderung seit 1789. Ergebnisse einer Konferenz. Berlin/ New York 1991, 103–117頁, 引用は109頁.

(9) Nehren: Selbstdenken, 90–91頁.

(10) Nicolai, Friedrich: Ueber meine gelehrte Bildung, über meine Kenntniß der kritischen Philosophie und meine Schriften dieselbe betreffend, und über die Herren Kant, J. B. Erhard, und Fichte, Berlin u. Stettin, 1799, 65頁

(11) Gökingk, Leopold Friedrich Günther von [Hrsg.] : Friedrich Nicolais Leben und literarischer Nachlaß. Berlin 1820, 91頁および, Gerlach, Karl Heinz [Hrsg.]: Für Vernunft und Aufklärung. Die Berlinische Monatsschrift (1783-1796). Eine berlinische Auswahl. Berlin 1987. 85頁

(12) Gerlach, Für Vernunft und Aufklärung, 85頁

(13) Birtsch, Günter: Die Berliner Mittwochsgesellschaft (1783–1798). In: Bödeker, Hans u. Ulrich Herrmann [Hrsg.]: Über den Prozeß der Aufklärung in Deutschland im 18. Jahrhundert. Personen, Institutionen und Medien. Göttingen 1987, 94–112頁, 引用は95頁.

(14) Göcking: Friedrich Nicolai, 90頁.

(15) Göcking: Friedrich Nicolai, 91頁

(16) Zöllner, Johann Friedrich: Ist es rathsam, das Ehebündniß nicht ferner durch die Religion zu sanciren? In: Berlinische Monatsschrift, IV. 1783 (Dezember), 516頁脚注

(17) Birtsch: Die Berliner Mittwochsgesellschaft, 103–104頁.

(18) 水曜会規約においては，こうした事態を避けるため「集会でおこなわれた特定の会話，判断，意見，主張の内容については深く堅い沈黙が良心にかけて守られねばならない」ことが定められている。Nehren: Selbstdenken, S. 93.

(19) Nehren: Selbstdenken, S. 91.

(20) Mendelssohn, Moses: Soll man der einreißenden Schwärmerei durch Satyre oder durch äußerliche Verbindung entgegenarbeiten? In: Berlinische Monatsschrift, V. (1785), Februar, 133–137頁

(21) Gedike, Friedrich: Über die heutige Schwärmerei (日付不明の講演，おそらく1784年7月もしくは8月)。引用はNehren: Selbstdenken, 93頁による.

(22) Nehren: Selbstdenken, 92頁.

(23) Schwartz, Paul: Der erste Kulturkampf in Preußen um Kirche und Schule (1788–1798). Berlin 1925, 39頁以下.

(24) Schwartz: Kulturkampf, 36–37頁

(25) Die Pflichten der G. und R. C. alten Sistems in Juniorats-Versammlungen abgehandelt von Chrysophiron. 引用は次の文献による。Dirk Kemper: Obskurantismus als Mittel der Politik. Johann Christoph von Wöllners Politik der Gegenaufklärung am Vorabend der Französischen Revolution. In: Weiß, Christoph: Von 'Obscuranten' und 'Eudämonisten'. Gegenaufklärerische, konservative und antirevolutionäre Publizisten im späten 18. Jahrhundert. St. Ingbert 1997, 196–197頁

(26) [Grolmann, Ludwig Adolf Christian von (Hrsg.)] : Die neuesten Arbeiten von Spartacus [= Weishaupt] und Philo [= Knigge] in dem Illuminaten-Orden jetzt zum erstenmal gedruckt, und zur Beherzigung bey gegenwärtigen Zeitläuften [Frankfurt a. M.] 1794, 165頁。

(27) Spalding, Johann Joachim: J. J. Spaldings Lebensbeschreibung von ihm selbst aufgesetzt und herausgegeben mit einem Zusatze von dessen Sohne G. L. Spalding. Halle 1804, 110頁，引用は Schwartz: Kulturkampf, 44頁による。

(28) Nicolai, Friedrich: Vorrede zur "Neue[n] allgemeine[n] deutsche[n] Bibliothek." LVI. Bd, 1. St. (1801), 7頁以下

(29) 『宗教論』は公刊されていないが，Schwartz: Kulturkampf, 73–92頁に収録されている。

(30) 同上，83頁

(31) 同上，82頁

(32) エルンスト二世が翌1785年3月に結社員J. B. コッペ宛書簡のなかで報告しているところによれば，フリードリヒ・ヴィルヘルムはすでにエルンスト公がデッサウに向かう以前の段階で「啓明結社に否定的な発言をしており」，結社員ヴァイマール公カール・アウグストも，「義兄〔=フリードリヒ・ヴィルヘルム〕との関係を損ねることを恐れて結社を去る意向を見せる」ような状況にあったという。Wilson, W. Daniel: Geheimräre gegen Geheimbünde. Ein unbekanntes Kapitel der klassisch-romantischen Geschichte Weimars, Stuttgart 1991, 329頁。

(33) シラーは1787年9月にヴァイマールでボーデを訪問しているが，そのおりの様子を友人ケルナー宛てにこう綴っている「彼〔＝ボーデ〕は迫りくるカトリックの危機についてベルリンの人々とまったく見解を一にしています。(…) 昨今の啓蒙主義の混乱状態は主としてイエズス会士たちの仕業だというのです」Schiller an Körner, Weimar den 10. September 1787. In: Schiller, Nationalausgabe, Bd. 24, 153頁。また，ボー

デはシラー来訪直後の日記において，ビースターと数日間親しく語り合ったことを書き記している。Bode, Johann Joachim Christoph: Tagebuch (Ms. in Abschrift von Georg Kloss). Archiv des Grand Orient Den Haag, 190. D. 14; Kloss MS 202, Bl. 11.

(34) Agethen: Geheimbund und Utopie. Illuminaten, Freimaurer und deutsche Spätaufklärung, Oldenburg 1787, 284頁。ボーデがロイヒゼンリングのなかに「イエズス会の陰謀」に対する有能な共闘者を見いだしていたことは，彼のパリへの旅行記（1787年5月7日）にもうかがうことができる。「早朝ロイヒゼンリング来訪。イエズス会およびラファーターの問題について大いに語り合う。(…) この男の洞察力と炯眼に富む考察はじつに興味深い」Schüttler, Hermann [Hrsg.]: Johann Joachim Christoph Bode: Journal von einer Reise von Weimar nach Frankreich im Jahr 1787. München 1994, 163頁.

(35) F. H. ヤコービは1785年12月5日の書簡において，有名なプロイセンの改革者の兄であり水曜会に近い立場にあったフォム・シュタインから聞いた話として，当時『ベルリン月報』誌上で展開されて大きな注目を集めていた「隠れカトリックに関する情報の発信源はロイヒゼンリングなる人物である」ことを述べている。Briefe von und an F. M. Leuchsenring. 1746–1827, hrsg. u. kommentiert von Urs Viktor Kamber. Stuttgart 1976, Bd. II (Kommentar), 245頁

(36) 1784年3月15日カント宛書簡。Kants gesammelte Schriften. Hrsg. v. der Königlich-Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd. X, Berlin u. Leipzig 1922, 371–372頁

(37) ロイヒゼンリングの生涯については次の文献を参照のこと。Briefe von und an F. M. Leuchsenring, Bd. II 170–175頁. 彼と啓明結社の関連についてはSchüttler, Hermann: Die Mitglieder des Illuminatenordens 1776–1787/93. München 1991, 93頁

(38) 黄金・薔薇十字団南ドイツ管区長のヴェルナー宛て1785年9月1日付書簡。引用は次の文献による。Engel, Leopold: Geschichte des Illuminaten-Ordens. Ein Beitrag zur Geschichte Bayerns. Vorgeschichte, Gründung (1776), Beziehung zur Freimaurerei, Verfolgung durch die Jesuiten, Fortentwicklung bis zur Jetztzeit. Berlin 1906, 242–243頁。

(39) Nehren, Selbstdenken, 94頁。ネーレンはここでメンデルスゾーンの批判対象となっているのは神秘主義的秘密結社であると考えているが，「民衆の啓蒙を目的とする秘密結社」という表現からもそれが誤りであることは明らかである。